

フィリピンにおけるイスラーム/ミンダナオ研究の体制に関する若干の報告：フィリピン大学の事例を中心に

床呂郁哉

報告者は2007年2月23日から3月9日までシンガポールとフィリピンに出張し、うちシンガポール(2月23日から26日)では東南アジアでの人類学、地域研究、歴史学に関連した研究体制について国立シンガポール大学の歴史学部関係者との情報交換を含む資料収集を実施し、フィリピン(2月27日から3月9日)では報告者の研究テーマであるフィリピンのイスラームやその研究体制、そしてその背景情報としてのミンダナオ和平を取り巻く政治的・社会的動向をめぐってマニラやミンダナオの大学関係者、イスラーム団体関係者、ジャーナリストらを含む関係者とのインタビューを含め情報・資料収集等を実施した。本稿ではこの出張で得られた知見や情報をもとに他の出張時に得られた知見も補足しながら特にフィリピン南部のイスラームないしミンダナオ情勢等に関する学術調査などに関連する事項についてマニラのフィリピン大学の関係者へのインタビューから得られた若干の知見を述べてみたい。

まずフィリピンでのイスラームを取り巻く状況について、ごく基礎的な情報を述べたい。まずフィリピンの人口構成であるが、総人口のうち人口比で90%以上がキリスト教徒が占め、とくにカトリックが全人口の約85%前後をしめるという点で、フィリピンは特殊な状況にある。とくにインドネシアやマレーシアなどのムスリムがマジョリティを占める国に対比すれば、フィリピンではムスリムが人口比で約5 - 6%前後を占めるマイノリティであるという点が対照的である。このフィリピンのムスリムは「モロ」と総称されるが、「モロ」は実際には言語学的、ないし文化人類学的な見地からは異なった複数の言語集団、民族集団から構成されているとされる。

歴史的に言えばフィリピンのモロ、すなわちムスリム諸集団は、ルソン島やヴィサヤ島などのフィリピン諸島中・北部の住民がスペインによる植民地支配を受けてキリスト教徒に改宗したのとは対照的に、19世紀末までスペインによる実効支配に抵抗し、南部のミンダナオ島やスルー諸島を中心としてイスラームに基づき独自の王国を形成して自分たちの文化・慣習・宗教を維持しつづけてきた。そして20世紀に入るとアメリカによる植民地統治、日本による一時的な占領などを経て、フィリピン独立後はフィリピン共和国の版図の一部として編入されるに至る。また社会経済的にはアメリカ植民地統治期に開始された、ヴィサヤ諸島やルソン島などからのキリスト教徒農民の南部ミンダナオ入植などによる政策によって、20世紀に入るとミンダナオなどのムスリム諸民族は結果的に先祖伝来の土地を奪われ経済的な窮乏化を被ることとなった。こうした状況が背景となって、1970年代前

半からはミンダナオやスールーのムスリムはフィリピンからの分離独立を求める分離主義運動を展開し、フィリピン政府と激しい武力衝突を繰り返していく。このうち最大の組織であった MNLF (モロ民族解放戦線) は 1996 年 9 月にフィリピン政府と和平協定に合意するが、その後も MILF (モロ・イスラーム解放戦線) などの組織は分離主義運動を継続しており、2000 年にはエストラダ政権下のフィリピン政府軍側の攻勢によって激しい武力衝突が再燃するなどの経緯があった。アロヨ現政権は MILF との和平交渉を実施しているが 2007 年現在でも合意には至っていない (その後、2008 年 8 月にはマレーシア政府の仲介により合意寸前まで至るが、調印直前になってフィリピン最高裁による違憲判決によって和平合意は崩壊している)。

こうしたフィリピン南部のムスリム分離主義をめぐる情勢や、フィリピンのイスラームないしムスリム諸民族に関してはすでにフィリピン内外の様々な研究者 (日本人を含む) による多様な分野にわたる研究が蓄積されている。今回の出張時には、まず報告者の長年の知人であるフィリピン人研究者のアシリ・アブバカル (Asiri Abubakar) 教授にミンダナオ、スールーをめぐる最新の政治情勢などについて情報を伺った。アシリ教授は現在、国立フィリピン大学 (UP) のアジア研究センター (Asian Center) に所属している。このアジア研究センターは 2007 年現在約 20 名弱のスタッフであり、フィリピン自身を含むアジア諸国に関する地域研究の機関として、その研究者には歴史、政治学、文学、経済、地域研究など広い分野の専門家がいる。なお同センターはかつては企業などヘシンクタンク機能を実施し、それによって資金を得る部分も大きかったが、今ではもうシンクタンクはしていないので、大学の運営費だけで運営している状況であるという。アシリ教授は南部のミンダナオやスールー諸島などのムスリムを研究しているが、ご自身もスールー諸島のホ口島出身のムスリム (タウスグ人) であり、年に少なくとも二回程度はサンボヤホ口、バシランなどに里帰りしているとのことである。つい先月もミンダナオ島のサンボアンガであった学術ワークショップに出席し帰ってきたばかりだし、こんどの 4 月にもサンボアンガでシルシラ・ファンデーションによる会議があるので出席するという。

アシリ教授とは近く実施予定の国政選挙が MILF と政府との和平交渉に与える影響や、和平交渉の見通しなどに関して詳細な情報交換を行ったほか、報告者の所属する東京外国語大学 AA 研でのイスラームに関する研究プロジェクトとの学術協力等についても意見交換を実施した。

そのうち和平交渉について一点だけ述べると彼の見解では、いわゆる Ancestral Domain (フィリピン南部のムスリムの先祖伝来の土地) の領域確定の問題というのが、和平交渉で残されたアジェンダの中では最大の障害だという。MNLF (モロ民族解放戦線) の和平協定の際にはこの自治区の領土問題に関してははっきりとした境界設定がされていなかったのが、今日に至るまで禍根を残す原因となったともアシリ教授は言う。MILF は MNLF の和平協定の失敗を反面教師としており、この自治区の領土範囲の問題には固執しているという。そして MILF が主張するのはミンダナオとスールー、パラワンでスペインがくる以前の領域

あるいは少なくともアメリカのモロ・プロビンス（ミンダナオとスールーのアメリカの統治領域）だった領土をすべてムスリム自治区としたいという主張だ。政府側はしかしあくまで現在の ARMM（ミンダナオ・ムスリム自治区）の領域を基本とし、もし拡大があるならバランガイ・レベルでムスリムが多数派のバランガイで住民投票を実施して ARMM に参加しても良いという案を主張し、双方は平行線になっているという。

この他、アシリ教授とはミンダナオとスールーあるいは MILF と政府の和平交渉に関してのさまざまなファクター（アブサヤフなど急進派組織の影響、和平プロセスへの外国の参加へのムスリムのパーセプション等）に関して意見交換を実施したほか、フィリピンにおけるイスラーム身分法廷の制度やマドラサ（イスラーム学校）の現状などについても意見を伺ったが、詳細に関しては割愛し、次にアシリ教授の属するアジア研究センターの研究体制に関する知見として図書館に関する情報を述べておきたい。

UP の総合図書館とは別に、アジア研究センターの建物には付属の専用図書館が設置されている。ここではアジア諸国に関する英語や各国語のコレクションがある。主張時に実際に拝見させてもらったときの印象では、各国別のなかでは日本や中国に関する蔵書コレクションが充実しており、またアセアン諸国に関する蔵書は独立したセクションになっている。アシリ教授によると大学自体の予算のほかにアジア開発銀行（ADB）等の資金援助によって購入した本も多いとのことである。かつて報告者が UP に留学していた当時と異なって、現在では同大学でも図書館の蔵書データの電子化が進んでおり、コンピュータ端末による OPAC によって UP の内部での本の所蔵はこのアジア研究センターの蔵書を含めて所在などが検索可能なシステムになっている。

さてフィリピンでのイスラームに関する高等教育・研究施設とえば、UP ではアジア研究センターのほかに、むしろイスラーム研究所（Institute of Islamic Studies）が有名であろう。このほかにミンダナオのマラウィには MSU（ミンダナオ州立大学）が Islamic & Arabic Studies を設けられているが、これについてはすでに科研総括班の資金による倉沢愛子慶応大学教授による出張報告で触れているので本報告では省略したい。また、このほか UP の College of Arts and Letters をはじめ、アテネオ・デ・マニラやアテネオ・デ・ダバオそして MSU の各地の分校などにもフィリピンのイスラーム文化一般やミンダナオやスールー各地のムスリム民族集団やその地域社会での歴史、政治、経済に関する研究者が在籍していることも付け加えておきたい。

今回の出張ではこのうち UP の上記アジア研究センターのほかに UP のイスラーム研究所のジュルピキル・ワディ（Julpikil Wadi）教授を訪問し、同研究所の研究体制やミンダナオ和平をめぐる情勢等についても長時間に渡ってお話を伺うことができた。ミンダナオ和平をめぐるインタビュー内容の詳細について述べることは紙幅の都合で割愛するが、かいつまんで要点だけを紹介すると、MILF と比政府との和平合意についての教授の総合的な評価としては早期の和平合意の締結は難しいだろうという意見であった。それはやはりアシリ教授の意見と同様にムスリムの先祖伝来の土地（Ancestral Domain）の領域確定問題

がネックなのだという。

また同教授によると、MILF と政府が和平を結ぶのは良いが、もうひとつの、すでに締結済みの MNLF と政府との和平協定との調整をどうすれば良いのかというやっかいな問題も残っている。このために和平プロセスは何度もマレーシアで開催する割には、その内実は停滞しているという。しかしこれもマイナスばかりではないともいう。というのも少なくとも和平交渉を続けているおかげで、大規模な衝突には至っていないからというのが同教授の評価である。そして同教授の意見ではフィリピン政府は MILF や MNLF との個別の二者間の交渉ではなく、MILF と MNLF そしてもちろん OIC (イスラーム諸国会議機構) を含んだ包括的 (comprehensive) な和平交渉を実施すべきなのだという。

この他にもミンダナオ和平やフィリピンのイスラームに関わる多岐に至るお話を伺うことができたが、紙幅の都合で省略し、以下はジュルピキル・ワディ教授の勤務する UP のイスラーム研究所での研究・教育体制についていくつか基本的な情報を紹介しておきたい。

2007年3月現在、同研究所では5名のスタッフで約50名の大学院生(修士課程のみ)を教えている。興味深いのはジュルピキル・ワディ教授を含め現在の研究所スタッフ全員がフィリピンのムスリム諸集団の中でもスルー諸島出身のタウスグに属する者で占められていることだ。さて同研究所の教授科目としてはアラビア語、シャリーア(イスラーム法)、イスラーム研究、神学(カラム)などが中心であるという。このうちアラビア語の教師は昔はエジプト人が教えていたが、今はエジプト人の教官はいないとのことである。イスラームに関する教育や研究に関してはドグマやドクトリンの学習ということではなくて、UPの教育方針の枠内に則った経験科学的なアプローチを主としているという。

同研究所も独自の付属図書館を有する。ここの図書館の蔵書は、やはりアジア研究センターの蔵書と同様に独自予算による購入だけでは不足し、寄贈などによる部分も少なくないという。具体的には英語の蔵書についてはエジプトから、アラビア語の蔵書についてはサウジアラビア政府からの寄贈が多いのだという。実際に蔵書を見せてもらうと、主に英語とアラビア語によるイスラームに関するコレクションが中心であり、単行本、雑誌などの他に、学位論文・修士論文なども多い。そうした修士論文や学位論文のテーマは主にフィリピンのイスラームに関するものであり、フィリピンのイスラームに関して研究する研究者にとっては参考になる。

なおジュルピキル教授に海外の大学と UP イスラーム研究所の間の国際学术交流などの体制についても訊くと、現在まで公式の MoU のようなものは少ないという(アメリカの大学との一例のみ)。ただし制度的なものではないがインドネシアの国立イスラーム大学のアズマルディ・アズラ教授やマレーシアのオスマンバカル教授などを同研究所に招聘するなどの交流は多いという。特にフィリピンでのイスラームに関連した高等教育研究では従来は基本的にはアラブ世界への志向が強かったが、今では東南アジア域内での交流も進めるべきだという認識はあるという。また今後の日本との学术交流や学術協力等の可能性についても訊くと、ジュルピキル・ワディ教授自身もすでに国際ワークショップ等の参加のた

めの来日経験もあり、今後も日本との学术交流に関しては非常に協力的であったことを最後に付けくわえておきたい。